



TITLE:

日用百科型節用集の使用態様の計 量化分析法について

AUTHOR(S):

横山, 俊夫

CITATION:

横山, 俊夫. 日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について. 人文
學報 1990, 66: 177-202

ISSUE DATE:

1990-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48318>

RIGHT:

日用百科型節用集の使用態様の 計量化分析法について

横 山 俊 夫

- I 歴史研究におけるふたつの難題
 - II 日用百科型節用集と日本文明
 - III 小口底面の条痕の語るところ
 - IV 小口底面の条痕写真の収集と計量化
 - V 電算機処理による条痕画像の作成
 - VI 条痕画像の型分類の試みと展望
- *付録／条痕画像処理プログラム

I 歴史研究におけるふたつの難題

歴史家の仕事の主要部分を占めているのは、言うまでもなく、文字で残された記録をもとに過去を再構成する作業である。問題は、書き残されやすいことがらと、書かれずにおかれがちなことがらとが、いつの時代にも存在することである。図式化して言えば、公的人格による公的事件は記録に残りやすく、逆に私人の日常生活、とくに当人や周囲の人々のあいだで、平素あたりまえとされている習慣のようなものについては、記録される機会が極めて少ないということである。

後者は、言いかえれば、ほとんど強い自覚を伴わずに日々くりかえされている行動というものが、或る距離をもった視点から観察され、観察者に或る情動を、つまり記録にとどめようと思うほどの感興を催すにいたることは稀である、ということである。この、意識化されることなくやり過ごされたはずの無数の事象の存在を、歴史家はどのていど念頭におくべきかというのが、難題のひとつなのである。これを仮に、歴史研究における“無自覚行動取り扱いの問題”と呼んでおく。

一例として、信仰ということがあげられる。仏壇に向かって手を合わせるものが朝夕のつとめとなっている人が、同じ習慣をもつ人々と接しているかぎり、その人の合掌の様相が記録に残される確率は低い。その人物が、市井のごくふつうの人であるばあいには、なおさらである。しかし、或る時代の、或る町での平均的な信仰のありかた、といったことに関心をもつにいたった歴史家が、まず知りと思うのは、このようなふつうの人の日々の振舞いである。

もっとも、書かれた資料が全く存在しないわけではない。断片的には、当人自身や家族・知

人による日記や随筆のなかに出る可能性はある。また、或る事件の発生をきっかけに、ふだんは記録に残されることの稀な人々の日常生活が、同時代の人によって調べ上げられ書き留められることもある。さらに可能性の高いのは、自分が異質な世界に属しているとの意識をもった旅人が記録を残すばあいである。たとえば、19世紀にヨーロッパから日本を訪問した人々が書き残した日本習俗の観察記録には、“異教徒”の習慣を叙述する際に用いられた常套表現の域を超える内容を持つものもある。

では、これらの書かれた資料を駆使して、そしてばあいによっては、現存の類似の習慣の観察に助けられて、歴史家がおぼろげながらも或る信仰の姿を蘇らせたとする。つぎに生じてくるのが、その“中味”の問題である。たしかに、商売繁昌に靈験ありとされる神社に、或る商人層が足しげく通っていたという事実がわかれば、その信仰内容は論理的に推定しうる。しかし難題は、その信心の深浅という“度合いの問題”である。たとえば、都合で社参を怠ることになった人が、どのていど罪の意識にさいなまされたかといったことは、その信仰の質を考える上にきわめて重要なことがらでありながら、ほとんど謎のままに残るに違いない。

社会学における近代化理論が盛んであったひと昔前までは、近代社会の世俗性という理念のもとに、時代が古くさかのぼるほど、そして地域が大都市から遠ざかるほど、また階層が“下”であるほど、“迷信深い”思考や行動が見られ、やがてそれは時とともにうすれゆく運命にあるといった観念が強く、歴史叙述のなかにも、この固定観念が濃い影を落としていた。ところが、このような世俗化の理論が史実にあわないことは、現在かなりの人々が意識している。日本では、19世紀はじめの山片蟠桃による無鬼・無神の論をまつまでもなく、17世紀末の『河内屋可正旧記』のような庶民の記録のなかにさえ、すでに狂言や浮世草子で広まっていた「正法に奇特なし」の格言をモットーとする徹底した現世主義者が、河内の大ケ塚村周辺にかなり存在したことを窺わせる記述もあり¹⁾、16・17世紀のイングランドにおいても、死後の世界の否定や無神論が、“下層”の人々のあいだにかえって強く見られたことが明らかにされている²⁾。さらに古代にさかのぼれば、ギリシアのデモクリトスや中国の王充といった人物を見出すことも可能であり、逆に現代社会を見れば、知識人であって、なおかつ“信心深い”人も少なくないのである。もちろん、同一人物の信仰の深さが、時と場所によって変化することも忘れられてはなるまい。歴史研究における“度合いの問題”は、重要でありながら、その扱いの困難さゆえに、正面から取りあげられることは少なかったといえる³⁾。

この“無自覚行動”と“度合い”とのふたつの難題は、たとえば、日本の17世紀末から19世紀にかけての識字層の起居振舞を知りたいのであれば、重宝記や礼法指南書といった日用書の出版・流布という現象に注目することによって、或るていどの推論を試みることはできる。そのような分野の出版がいかに書肆をうるおすものであったかについての記録としては、つとに『元禄太平記』（巻之一）が著名であるが、近年のごとく、板元の台帳から出版物のジャンルご

との出版経費中に占める板賃率の違いを見出し、それによって発行部数を推定するような研究までがあらわれてくると⁴⁾、たとえば起居振舞をめぐって、どのような教本がどのくらい流通したかを試算することも不可能ではなくなったといえる。また、思想史研究の分野についてはあるが、発行部数のわかっている定期刊行物に新思想が発表されたばあい、直接の影響がどれほどの範囲に及びうるかについての数理統計分析の試みも出されている⁵⁾。

しかし、出版物が流通したということと、そこに記された内容が読者の実生活に具体的にどのようなかたちで影響をあたえたかということとは、近くにあるようで別の問題であり、けっきょく、この種の日用書は、“無自覚行動”や“度合い”の問題に答えを出すむずかしさを、より鮮明に研究者に意識させるという逆説をもたらし資料なのである。

本稿でとりあげる日用百科型節用集というものの、じつは日本の18・19世紀の識字層の諸礼のありよう、ひいては礼の集成としての日本文明の質を考えるにはきわめて重要でありながら、ただその内容を読むだけでは、それを使った人々の生活の実態を知る手段として、はなはだ不十分な資料でしかないものである。誰が、どのようなかたちで利用したのか、それがわかりにくい。しかし逆に、それさえわかれば、次節で述べるような理由で、この出版物ほど、上記のふたつの難題に答えを出してくれそうなものは、そう多くないと思われる。

- 1) 野村 豊・由井喜太郎編『河内屋可正旧記』大阪／清文堂出版、第3版、1988年、91ページ。
- 2) Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic*, London: Penguin Group, Peregrine Books, 1978, pp. 200-206.
- 3) 横山俊夫「政事都市の肖像」、中村賢二郎編『歴史のなかの都市』京都／ミネルヴァ書房、1986年、49～74ページ所収を参照。
- 4) 宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』京都／同朋舎出版、1982年、260～295ページ。ただし、データは天保期に限られる。
- 5) はやいものでは、Alvar Ellegård, 'Public Opinion and the Press: reactions to Darwinism', *Journal of the History of Ideas* (New York), xix (June 1958), 379-387.

II 日用百科型節用集と日本文明

節用集は、日本の中世後期、西暦では1450年代から1470年代のあいだに生まれたとされている。もとはイロハ順配列のかな引き漢字語辞書であった。“高位”にある男子がものする雅びな詩文、あらたまった手紙や記録は、唐様に漢字を連ねなければならなかったのはすでに古い伝統であったが、この時期節用集が編まれた背景には、漢字語をさらに簡便に引き出したいとの願望が高まっていたと見てよい。語頭のイロハ音別にわけられた語彙集は平安末の『色葉字類抄』にさかのぼるが、節用集では、このように分類された語群が、さらに『下学集』の体裁からヒントを得て、天地・草木・人名などの門部にわけられたのが幸いして広範な利用者を生

み出し、すでに16世紀中にいくつかの刊本が行われ、17世紀以降には、数百にのぼる大小さまざまな版が見られることになる。節用集の出版がようやく絶えるのは、20世紀初めのころである。

この4世紀半にわたる節用集の歴史を二分すると思われる時期が、元禄から享保にかけて、西暦では17世紀末から18世紀初めであると思われる。このころを境に、節用集はたんなる和漢辞書から、生活百般の知識を盛りこんだ日用百科へと変貌する。もちろん、足利將軍代々や禪宗五山、二十四節気、京都の横縦小路の名称、全国州名、己と巳のごとく互いにまぎらわしい漢字を並べた「分毫字」一覧といった付録は早くから散見された。しかし、17世紀末にいたり、節用集はあきらかに生活臭を帯び始める。立花、まじない、針灸指南、目録認め様などといったものの簡略な記述が、絵入りで大幅に採り込まれるのである。この傾向は、19世紀前半の文政・天保・嘉永期あたりに極相を呈するにいたり、丁数もしばしば300を越し、その内容も、名所図に世界地図、皇統一覧ならびに武鑑、諸国大社、諸宗本山・末寺まで、あるいは服喪の日数、算法や小笠原流札式、四季の挨拶文例、さらに料理献立、家庭薬のつくりにかた、男女相性鑑定法、はてはハングル文字表にまで及ぶようになるのである。なお、このような大冊本を補うかたちで、「早引」と称える字引中心の袖珍版もひろまるが、18・19世紀に「せっちょうしゅう」と耳にして思い浮かべられたのは、やはり日用百科型のものであった。その証拠に、博識をほめる表現として、「せっちょうみたいな人」というのが20世紀初めまで広く行われたことがあげられる。それはまさに節用集大冊化の時期に生まれた表現であったのだろう。

日用百科型節用集は、このように一家に一冊あれば至便とされたものであるが、重宝記や万宝類といったいわゆるハウツーものとは、以下にのべる三点で性格を異にした。

ひとつは、生活百般の知識を簡記した百科全書的出版物であるとはいえ、中心部は和漢辞書であったこと。したがって使用者は、漢字語を連ねる公文を認める用のある役持ちの家の主であるのが普通である。町方でいえば町年寄やその補佐役の家、在方では庄屋役あたりが、節用集一部の値の高さ（300丁を超えるものでは一両ないし二両でいど¹⁾）と相まって、流布の境界層をなしていたと見てよい。ただし、その持主にたよることで節用集の知識を間接的に享受しえた人々を含めるなら、利用者の範囲ははるかに拡大することは、筆者の聞き取り調査からも明らかである。

いまひとつは、この書物が伝えた知識が、一見雑多な生活知の寄せ集めのようでありながら、天・地・人を包含するひとつの体系を備えていたことである。その体系とは、端的に言えば、礼法つまり人や事物の高低親疎の距離のとりかたであったと言ってよい。日用百科型節用集の記事内容は、いずれの版もほぼ同様の配列で構成されている。大まかに言えば、巻首部に歴史と地理と社会にかかわる知識、巻の中央部が字引き、また字引きの頭書として、年代記や寺院

一覧といった、巻首部の各論ないし補論といえる知識も付されている。そして巻末部には、陰陽五行説や宿曜道にもとづく、吉凶占いや名付け指南などの知識が配されている。この配列は、編者や版元の個性、あるいは時代や出版地によって多少は変化するものの、後世から振り返れば、むしろ数多の版が出されながら、あたかも膳の汁菜の配置のごとく、大枠において不変であったことこそ興味深い。

そして巻首部は、読者に、自分がいかなる時代の、どのような国の、どのようなグループの中に生を営むのかを視覚的に意識させると同時に、それぞれの立場に応じた書簡の認め方や起居振舞や道具使用の作法を指示するという意味で、主に対人・対物関係の礼法に関する知識を与え、中央部は真書と行書両体の漢字語を教えるという意味で、格式に応じた書き言葉による意思表示のかたちを読者に与える。そして巻末部は、歳徳神や破軍星など多様な神々にたいする慎みや近づきの作法を教えたのである。しかも注目すべきは、巻首部における人界と天界の境は連続的であり、神格化された武仙や歌仙・俳聖もふんだんに登場する。つまりこの書は、日常のあれこれの礼を教えるものでありながら、宇宙的なニュアンスで人や事物の序列化を行い、ひとつのゆるやかな体系にまとめあげるといった側面を有していたと見てよい。

この書が、他のハウツーものと異なる第三点は、上にのべたことと関連して、それが指示するところに従うばあいと従わないばあいの大きな落差が、読者の多くに意識されたいことである。すなわちこの書は、それに従う者には、礼にかなっているという意味での正統意識や安心をもたらしと同時に、とくに文の道における一層高度な礼法の存在をも意識させ、それを習得すれば“上品”の世界に近づくとの感覚を与えうる性格を兼ねそなえていたことが重要である。しかも“上品”なる人界は、とぎれることなく神仙界に通じていた点も見のがせない。それゆえ、逆に節用集に従わぬことは、タブーを犯したばあいに覚悟しなくてはならないような宗教的苦痛を、時として感じさせたと見てよい。これはたとえば、節用集の巻末部を拡大させた書物である大雑書類にたいして、それを「怖い本」と見なすような態度がかつて存在したことが、筆者の京都市内での聞き取り調査で明らかになっていること、あるいは、大冊本節用集がそれぞれの所蔵家でしばしば「門外不出」や「他家貸出無用」の扱いを受け（京都府下での聞き取り）、さらには、墓石と並ぶほど重要なものと考えられたばあいがあること（福島県下での聞き取り）からも、推定されるところである。

一般に、文字資料からは、節用集の評価は低い。慶長2年に、いわゆる易林本節用集が出されるにあたって、編者である本願寺の寺内衆、夢梅斎易林自身が、同時代に行われていた節用集類には誤り多しとされるものがあったことを同書の跋文でにおわせており、同じ意見は約1世紀後に儒者貝原益軒も『和俗童子訓』（巻之四）のなかで述べている。あるいは、『西鶴織留』や、すこし後の『柳樽』といったものを見ても、節用集にすぎる人々を嘲る表現が見出され

る²⁾。それは、中に盛られた多様な解説が、すべてそれぞれの道のごく基礎的な知識の簡記であったことにもよるだろう。しかし、文人が書き残したこのような節用集評価は、彼らが節用集を使わなかったことを意味しない。文字を綴る習慣のある人の座右には、必ず一冊置かれていたのである。そして、さまざまな職種にわたる所蔵家を訪問して聞くことのできる、各戸での節用集の丁寧な扱われ方も、大いに注目されてよい。というのは、文明というものを、武断でなく礼法の発達によってもたらされる安定政体と捉えるなら、この書物こそ、その内容と流布の広さから言って、工業化以前の日本文明を支えた、或る種の聖典ないしそれに準ずる存在ではなかったかと考えさせられるからである。

以上のような推定は、筆者が1981年くらい断続的に行ってきた所蔵家訪問による聞き取り調査の過程で醸成されたものであるが、日用百科型節用集が自宅で使われていたのを小児期に目撃している世代が、現在80歳以上の高齢に達しており、聞き取り内容はきわめて曖昧なばあいが多く、しかも現在の所蔵家のみを対象としていたのでは、どうしても事例がその書を大切にしたい家々に偏るきらいもあり、けっきょく第Ⅰ節で述べたような、誰が、どのようなかたちでこの書物を利用したかについての信頼できるデータを集積することは、この方法だけでは不可能であるとの結論にいたった。本稿で論じようとしているのは、それに代わる方法として、筆者が1988年くらい試みている、残存の日用百科型節用集の小口底面の摩耗の計量化分析法についてである。以下、本題に進む前に、小口底面の摩耗が意味するところについて、簡単な解説をしておきたい³⁾。

- 1) 文久4年版の『永代節用無尽蔵』は「先祖が寺町三条下ルの神先宗八(14軒の板元の内)で1両ほどで購入」との聞き取りを、京都市中京区の京染悉皆の家で得ている。武田家蔵の外交官アーネスト・サトウの『蔵書日録』によれば、明治初年に『江戸大節用海内蔵』が1円70銭で購入されている(萩原延壽氏のご協力による)。また八木敬一氏のご教示によれば、同氏のコレクションに須原屋茂兵衛発行の『江戸大節用』の領収証一通があり、値は2両2朱となっている由である。
- 2) たとえば、八木敬一「江戸の辞書さまざま」『言語』13巻12号(1984), 75ページ参照。
- 3) 以上の論は、つぎの2論文に詳説されている。横山俊夫「一八、一九世紀節用集の政治社会学的研究」(昭和60年度科学研究費補助金・研究成果報告書)1988年。Yokoyama Toshio, 'Some notes on the history of Japanese traditional household encyclopedias', *Japan Forum* (Oxford), vol. 1, no. 2, pp. 243-255 (1989).

Ⅲ 小口底面の条痕の語るところ

日用百科型節用集が、所蔵家においてどのような使われかたをしたかは、それぞれの表紙ならびに本文の汚れや傷みが、あたかも老人の顔の皺のごとく多弁に物語っている。なかでもとくに注目に値するのが、小口の底面に出る黒変である。

大冊本化した日用百科型節用集は、総丁数が300から450にも及び、厚さは6～9 cm ほどに

なる。それらが開かれるときには、綴じしろ（背）の反対面である小口（腹）か、小口底面の腹寄りの部分に指がかけられ、それからめざす丁が繰り出されるまで、各丁の下端の腹寄りの隅がつまみ上げられるのが習いである。一般に和紙は、碎木パルプ使用の洋紙に比べて摩耗に強く、手垢がつきにくい。しかし節用集のように、日々、しかもたいてい2ないし4世代にわたって使われるとなると、腹の中ほど以下と底の腹寄り部分の小口が、摩耗と手垢で黒灰色に変わる。このような変色は、たまたま汚れた手で触れたり、筆先の墨が飛んだりしてつくシミとは容易に区別がつく。ただし、この部分の黒変は、全丁にまんべんなくゆきわたることが多く、所蔵家ごとの個性は出にくい。

ところが、小口底面の、背から腹までのさしわたしのうち、背から3分の2あたりまでの部分については、同様の黒変が筋紋あるいは条痕の形状をとる。それは、各丁のこの部分は、その丁が開かれている時にかぎり読者の手指や袖に触れ、繰り出しの過程ではほとんど摩耗を受けないためである。つまりこの部分は、その丁が参照されるごとに少しずつ摩耗させられながら、近接の丁の同じ部分が、その時ともに摩耗させられることはないため、各丁の参照頻度に応じて個別に黒変が進み、条痕のかたちをとるにいたる。そして他の小口部分のように、まんべんなく汚されることはないのである。（写真1参照）

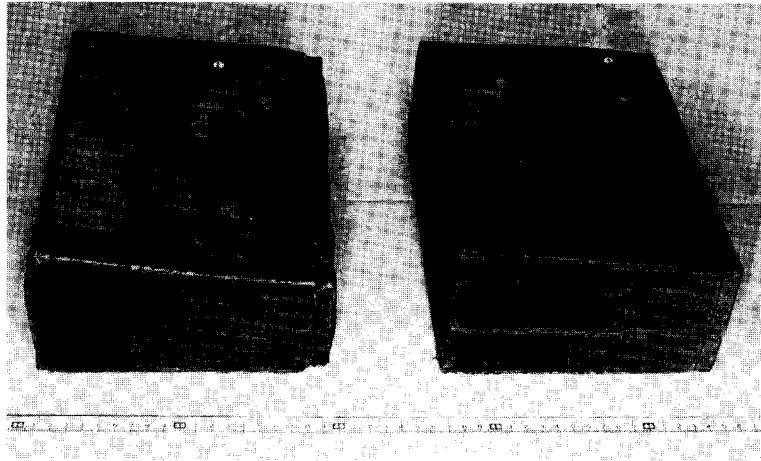


写真1

このような条痕に爪を挿入してその丁を開いてみれば、名付け指南の「名乗字」の項であったり、胎教を説いた「陰陽和合子孫出生弁」であったり、「色紙短冊認め様」の図解であったりする。その丁が頭書と字引本文の二段割り、あるいは上中下の三段割りとなっているばあいには、そのいずれの段の記述が参照されたかは判定しにくいですが、各段の記事が数丁にわたり、しかもそれぞれの始まりと終わりの丁が他の段の記事のそれらと一致しないばあいには、条痕の幅に対応する記事をつきとめることで、使用者がどこをよく見たかを、かなり正確につきと

めることができる。

既述のように、日用百科型節用集が生活百般にわたるさまざまな礼法を網羅していることとあわせ考えるなら、無意識のうちに残されたこのような条痕の表われかたを調べることで、かつての持主たちが、それをどのように使用したかについて、偽りのない、しかもかなり具体的なデータを集めることができる。と同時にまた、或るていどまで、使用者の生活の現実そのものの、つまりどのようなことがらに、どのていど執心して暮らしていたかというところに迫る手だてとすることも可能であると思われる。「或るていどまで」と言うのは、条痕のつかない部分の読みがむずかしいからである。たとえば算法や茶の湯を師匠のもとで熱心に学んできた人のばあいには、節用集に簡記されているそれらの伝を見る機会は少なくなりがちである。したがって、条痕のついていない丁の記述は、使い手が実生活でなおざりにしていた事柄であるとは、かならずしも断言できない。

日用百科型節用集の記事は、日常生活のうちでも、ふだんよりあらたまるべき場面（その範囲は、たとえば公文を認めるとか、大きな取引を行うとか、大切な客をもてなすといったことから、冠婚葬祭にからむ晴れがましいものまで多様である）において、“ほぼ無難”あるいは“やや上品”となるべき知識にとどまるのである。

したがって条痕は、それがついている丁に記された分野の礼法の知識が、その節用集の使用者に不足していたか、忘れられがちであったと同時に、そのことを本人が気にしたこと、しかし節用集でいどの略記で確かめるだけで充分なりと考えた、ということを経るとみてよい。たとえば、結納の際の目録の認め様など、ふだんは忘れていながら、いざとなると、規範から大きくずれてはならないと考えるばあいを想定すればよい。また別の人物は、“料理”と呼ばれるものをととのえるにあたり、常には気にしない魚鳥の盛りつけも、その日ばかりは法式にかなっていなければならないと思うかもしれない。あるいは、“上々”の人物へ手紙を認めるときには、「恐惶謹言」の留めも「様」付けも、行書でなく真書でなければならないと考えるばあいもある。

つまり、条痕が濃くついている丁に盛られた知識とは、その節用集の使用者が、ややもすれば曖昧になり、崩れてしまいがちなその分野の自分の礼法をしばしば保とうと努めた、いわば当人の文明化の周縁部分を構成する知識であったと考えられるのである。したがって、残された条痕のさまざまな形状を収集し、そのなかにいくつかの類型が見つかるなら、それらこそは、当時の節用集使用者たちの、ややあらたまろうとするばあいの執心事のドミナントな偏りぐあいを示すものであり、大げさに言えば、彼らの無意識のうちの日本文明維持の努力の類型が表われていると見てよいのである。

このような考えから、現実には各所蔵家あるいは大学その他の公私の図書館や文庫に蔵されている日用百科型節用集の小口底面の条痕データの採集と分類を試みることにした¹⁾。以下Ⅳ・

Vの両節にわたり、筆者が種々の試行を経て、現時点では妥当と考えるにいたった資料選択およびデータ採集・集積法、データの画像処理法について解説したい。

- 1) 所蔵家が保管する節用集の小口底面の条痕と、大学その他の文庫中のもののそれとでは、いささか性格を異にする。ただし、後者のばあいにも、研究者が幾度かていねいに繙いたていどでは、条痕に影響が出ることはないと言える。ただし、国語学教室のようなところで辞書編集に利用されたばあいは別である。また、前者のものでも、後年小児の玩物となったり、囲炉裏の煙にいぶされたりして、本稿の方法では処理できない例もある。この問題は、いずれデータ集積が進んだ段階で再検討したい。

IV 小口底面の条痕写真の収集と計量化

この試みのための資料としては、数々出された大冊本日用百科型節用集のなかから、ひとまず1種類だけを選び出し、データ採集をその節用集の諸版に限定することにした。未だ実験段階を完全に脱したとはいいがたいこの方法の性格を検討するには、或るていど条件を単純化しておいたほうが、後の、より複雑な分析の基礎にしやすいからである。そしてその種類を『永代節用無尽蔵』と決めた。理由は端的に、残存数の多さと書誌的データの豊かさである。

筆者の1都2府9県にまたがる所蔵家訪問調査¹⁾において、大冊本ではこの節用集にもっともよく出会っている。ということは、これを資料に選べば、小口底面の条痕と聞き取りによるデータとのつきあわせも、他種よりは多く可能ということになる。そして、家蔵件数が多いとの発見は、『永代節用無尽蔵』の版歴が長いということと関連していると思われる。

一般に、日用百科型節用集で丁数が300を超えるものが出るのは、18世紀末の天明・寛政年間以降である。主なものとして、まず上記の『永代節用』のほか、『倭節用集悉改纂』と『江戸大節用海内蔵』があり、これら3書に加うるに、『都会節用百家通』や『大成無双節用集』などが挙げられる。前の3書は、いずれも版を重ねるうちに大冊となったもので、編者・版元・書名の一部に異動があるものの、それぞれに1世紀を超す系譜をたどることができる点で共通している。

『倭節用』は、元文6年（寛保元／1741）に風之子なる人物により京都で出版されたものが、宝暦12年（1762）まで版を重ね、その後、約半世紀を経て文政元年（1818）に、後に『西国順礼道中細見大全』を著す俣野通尚の「纂補」により、320丁余りのものとして蘇った。8年後には『倭節用集悉改大全』と名を改めて再版され、天保年間に入っても重版があったようである。なお文政元年版は、京都のほか江戸・大坂の書肆11軒による相合版である。

『江戸大節用』のほうは、現存のもので刊年が明らかなのは、江戸の筆耕家中村経年（松亭金水）の「補輯」になる文久3年（1863）版のものだけである。その序と奥付に鑑るに、天保4年（1833）には、幕府大番組与力の高井蘭山²⁾の手で「増輯」された「大部」の稿本が存在

し、しかもそのまえには、宝永元年（1704）の「元版」があったという。文久版は450丁ばかりの大冊であり、版元も三都および名古屋にまたがる17軒の合同となっている。

以上のごとく、『倭節用』は約1世紀の版歴の中に半世紀の空白があり、『江戸大節用』のほうは、1世紀半の歴史のうち最終段階のものだけが残存するというかたよりがある。これに比べて『永代節用無尽蔵』のほうは、大きなとぎれを示すことなく1世紀以上にまたがる版歴を示すロングセラーであった点が重要である。この節用集は、初め『永代節用大全無尽蔵』の名で寛延3年（1750）、河辺桑揚なる人物により、江戸と京都で出され、100丁余りの厚さであった。その後、幾度かの改訂を経、堀源入斎なる人物が手を加えた稿本が出来、それをもとに天保2年（1831）、往来物や道歌集を編んでいた堀原甫の増補により400丁を超すものとして出版され、その後、嘉永2年（1849）と文久4年（1864）に版を重ねている。この出版にたずさわった江戸と京都の書肆は、もっとも多い時で15軒を数える。なお、この版歴の中ほどを補うものとして、京都市上京区の、さる公家に代々出仕した家から、文政13年（天保元／1830）版の『永代節用無尽蔵』が見つかった³⁾。版元は京都と大坂の書肆各1軒のみで、奥付によれば、すでに天明7年（1787）から3版を重ねているとあり、その長い人気を物語っている。

なお、さきに述べた『都会節用』と『大成無双節用』の二書は、大坂で生まれたものであり、前者は『和漢年契』の作者高安蘆屋の編んだものを、鎌松荷なる人物が「増刪」した約360丁のもので、寛政末期から天保中期までの40年ほどのあいだに、少なくとも4版を重ねている。後者は、幕末大坂で「博識」として知られた鶴峯戊申が編み、同じく大坂の戯作者晩鐘成が補ったもので、成立は文政年間、刊行をみたのは嘉永2年の1度であったようである。天地22cmと、他の大冊本より4cmほど短かく、丁数も320丁余りで、やや小ぶりである。

このような対比に加えて、『永代節用』が大冊本節用集類のなかでは、現在公私の図書館や文庫に蔵された点数が群を抜いていることも無視できない。上記5種の『国書総目録』（旧版）記載の点数は、焼失あるいは所在不明の文庫のものも含め、つぎのとおりである。『永代節用』42点、『倭節用』24点、『江戸大節用』26点、『都会節用』17点、『大成無双節用』6点。

以上のような事情により、小口底面の条痕を採集する対象として、『永代節用無尽蔵』の諸版のうち、大冊本化したもの（既見のものでは文政13年版以降の諸版）に的を絞ることにした。

つぎに、それらの小口底面の条痕のデータ採集法について述べる。節用集の使用態様を知ろうとの本来の関心から言えば、前節でのべたごとく、小口底面にあらわれた黒変に注目するという光学的アプローチ以外にも方法がないわけではない。たとえば各丁に中性子を照射し、生じた放射能を測定することで使用者の手垢や汗の残存量を調べる方法（いわゆる neutron activation analysis）、あるいは、各丁の一定部分を定圧ではさみ、荷電してその静電容量を測定するといった方法もある。さらに、これらの物理学的方法とは別に、各丁の一定位置から小片を切

りとり，その組織を化学分析するということも可能である。しかし，これらいずれの方法も，大きな装置と共同作業のための人員を必要とするのみならず，もともと紙質や保存状態が一定しない和本類にたいして，あまりにも精度の高い分析機器を用いることで，逆にデータを混乱させかねないこと，また，第Ⅱ節で述べたように，時には家宝に近いかたちで蔵されている節用集にたいして，その一部になりとも損傷を加えてしまうことになり，現実性に乏しいと言わざるをえない。

けっきょく，小口底面の条痕の濃淡分布を光学的手法で計量化してデータベースを作成し，電算機による画像処理にもちこむのが，現在のところ簡明にして有効なものと思われる。以下，本節ではデータベース作成にいたるまでの2段階の作業について説明する。第1は小口底面の写真撮影，第2は第1で得られた映像のドラムスキャナー処理である。

1. 写真撮影の基本理念は，できるかぎり一定条件の下での映像を得ることである。あわせて，資料をいためないこと，ならびに器材運搬が簡便であることも考慮されねばならない。そのため，〈a〉適切な撮影台の設計・製作，〈b〉フィルムの選択と管理，〈c〉恒輝度照明，の3点に関し，1988年5月から6月にかけて，京都の清水光芸社の清水実社長・清水克実常務の協力を得て⁴⁾，試作と実験を行い，その結果つぎのような方法を採用ことにした。なお，撮影機としては，60 mm×70 mm 版の原映像の撮れる大型の1眼レフレックスタイプ（Mamiya RZ67／レンズ Sekor Z， $f=110$ mm）を選び，フィルム巻き上げ時の撮影機の位置のズレを避けるため，電動巻き上げ機をとりつけた。

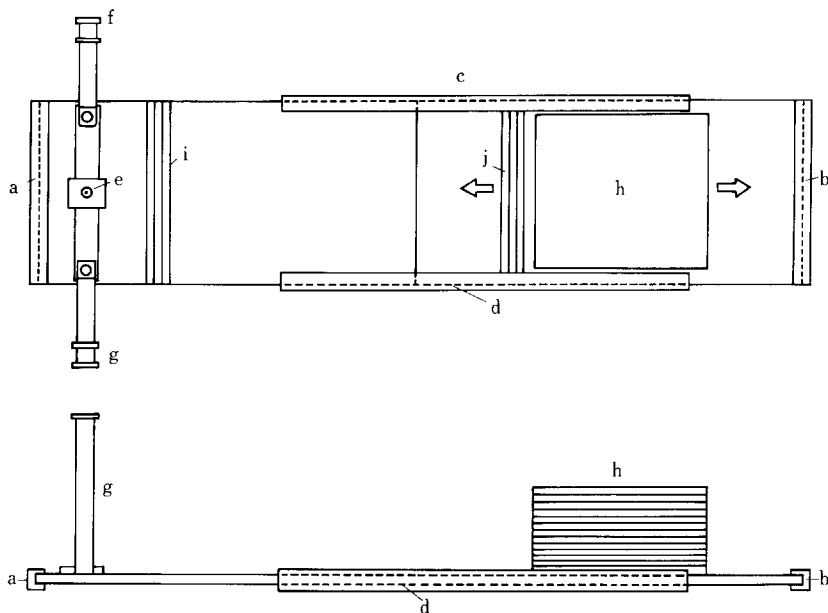


図 1

〈a〉 撮影台設計の重要条件は、節用集の小口底面と写真フィルム面とがつねに3次元的に平行に保たれていること。さらに、節用集の小口底面に各丁の下端が並んでつくり出す縞目が、できるかぎり水平の平行線になるようにすることである。これは、ドラムスキャナーの走査が、小口底面の縞目と平行に行なわれるためである。以上を念頭に図1のような撮影台を作成した。基盤は縦470 mm・横225 mm・厚さ9 mmの長方形のベニア板2枚。縦940 mm 1枚としないうのは運搬の便のためである。いずれも片方の横小口には破損防止と台の安定化のため、断面凹型のアルミサッシがはめられている(a, b)。この2枚の板を撮影時に縦長に接続させ、両側から上記と同タイプのアリミサッシ(c, d)ではさみこんで留める。eには撮影機を、f, gにはストロボを固定する。なお、被写体の節用集は、縦220 mm・横208 mm・厚さ7 mmの発泡スチロール板を積み重ねた台hの上に、つぎにのべる締具で整形されて据えられる。なお、hはcとdによってレールのごとくはさまれており、白矢印の方向にのみ移動できる。

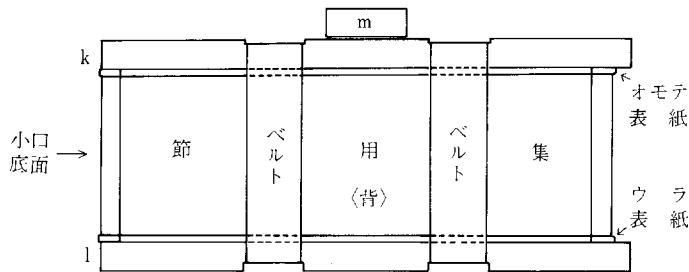


図2

締具は、図2に見られるように、2枚の板(k, l)と布製ベルトからなる。板は縦262 mm・横226 mm・厚さ14 mmのラワン材で、節用集のオモテ・ウラの両表紙にあてがい、それを二重鑽付きの幅30 mmのベルト(市販ブックバンド)2本で締める。なお、ベルトの締めりをよくするため、lの底面を台hに密着させるため、締板にはベルト幅の溝が2 mmの深さで刻まれている。ベルトの締め具合が適切かどうか、つまり小口底面の縞目が平行線にできるかぎり近づいているかどうかは、締板kの上に十字交叉型水準器mを据えてチェックする。

以上の軽便な装置で、撮影の基本条件であるフィルム面と小口底面の平行を保つための操作としては、撮影台基盤上に印されたi, jの平行線群を利用する。すなわち、eに撮影機を固定する際にレンズ棒の先端が上から見おろしてiと平行であること、また同様にして、小口底面がjと平行であることを確かめる。かつ、3次元的なズレを修正するため、小口底面の延長面と基盤面が垂直に交わっているかどうかを、大型三角定規でチェックする。

一般に、一軒の書肆が一度に和本を装訂する数は多くない。刷置き分の紙面を折り、小口を揃えて裁断し、表紙をつけて袋綴じに仕上げる数は、1回20~50部でいと推定されており⁵⁾、たしかに、そのことが理由となって、同一の版の節用集であっても、それぞれ微妙にサイズを

異にしている。しかし、本研究のごとく、小口底面の条痕の型分類をめざしているようなばあいには、撮影時において、できるだけ同一サイズの映像が得られるのが望ましい。そのための操作は、撮影機のファインダー・スクリーンを方眼マット型にすることで解決する。すなわち、被写体たる、平置きされた小口底面の左右の両端（背・腹の下端）が、つねに中央の一定の複数の方眼からなる横長の長方形の枠とかさなるように、 h を前後に微移動させるのである。この微調整による照明光量の変化は無視してよい量である。なお、小口底面の厚み（平置き時の上下の幅）は、紙質と紙の摩耗の度合により、同一の版のものでも 2 cm ほどの差が生ずることもある。そこで撮影時にあっては、台 h の上に据えられた小口底面が示す横長の長方形の上辺と下辺が、ファインダー・スクリーン上の横中心線をはさんで等距離に保たれるよう配慮されなければならない。この課題は、 h を構成する発泡スチロール板の数を調整することで解決する。以上が撮影台の概要と、撮影操作上の留意点である。

なお、小口底面にあらわれる、節用集のオモテ・ウラ両表紙の下端は、ドラムスキャンングの際、各丁の下端のデータとコントラストがつくように、白紙を巻きこむようにして覆っておく。資料が 2 巻本のときには、同様に、それぞれの表紙をすべて覆った上で積み重ねるようにする。

〈b〉 フィルムについては、現像されたものに出た条痕の濃淡をドラムスキャナーで解析するという方式に照らして、条痕像の黑白コントラストが、撮影時点でフィルム感光面の化学的性質によって強調されてしまうことを避けたほうがよいとの判断により、幾種類かをを用いた試写を経て、コダック社のカラー・ポジフィルム（ブローニュ版エクタクローム EPR）を使用することにした。なお、同一種のフィルムでも、その感光面の組成には微妙なムラがつきものである。データベース作成の段階で、このことによる差違が多少出るとは念頭に置かなければならない。つまり、ある条痕の濃度の絶対量を問題にするような研究には、技術面から言っても、この方法は不向きであり、あくまでも様々な濃淡分布の類型比較の域内にとどまるべきものであるということである。ともあれ、そのような類型比較をめざすにせよ、フィルムの質はできるだけ一定であるのが望ましい。そのための方策として、1 年分の調査に使うフィルムは、同一工場から同日に出荷された通し番号のものをまとめて購入し、冷蔵庫で恒常低温保存して用いるという原則をたてた。

〈c〉 照明については、つねに一定の光が小口底面に照射されることを理念に、各種の方法で試写を行い、その結果、1 メートル以上の定距離からのパラソル式反射光を左右からあてるのが最適との結果を得たが、所蔵家へ出かけての現地撮影のためには不都合も多く、けっきょく市販の小型ストロボ（ガイドナンバー 25）2 台を、カメラの左右につき出させた固定クランク上に据え、発光面には広角レンズ使用時用の散乱フィルターをつけることにした。これをつけないと、各丁下端が不揃いのばあい、突出気味の丁の陰が写ってしまうからである。なお、フ

フィルム面から被写体までの距離は 655 mm 前後と近いので、上記 2 台の光源を使えば、太陽が直射しない室内でなら、他の家庭用照明光や自然光があっても、反射光量が左右されないという利点もあった（露出は、したがって $F22 \cdot 1/60 \text{ sec.}$ に固定）。またストロボの固定位置は、レンズ中央の高さより 850 mm 上になっている。これは撮映台基盤からの反射光量を考慮してのことである⁹⁾。なお、ストロボの充電完了ランプの点灯は、充電容量がかならずしも 100% 満たされたことを示さないばあいが多いので、点灯直後にはシャッターを切らず、通電から点灯までに要した秒数分だけさらに待機してから撮影することにした。

以上のような撮影手順は、少々な馴れを必要とするものの、高度な熟練が求められるわけではなく、同様の手法による研究は、別の分野、たとえばヨーロッパの教区教会の説教用聖書などを対象にしたような研究分野でも手軽に試みることができるだろう。また将来、携帯可能なスキャナーで、資料から直接に磁気変換されたデータをとれるタイプのものが開発されたらあ

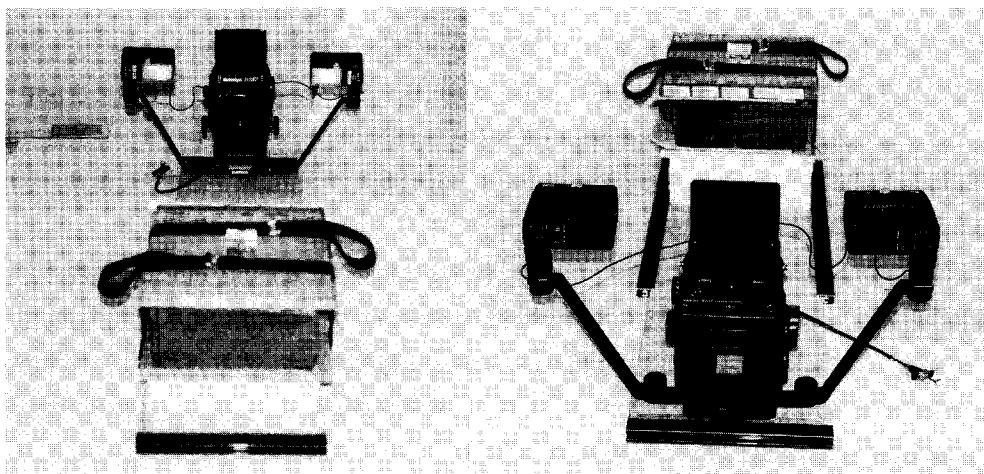
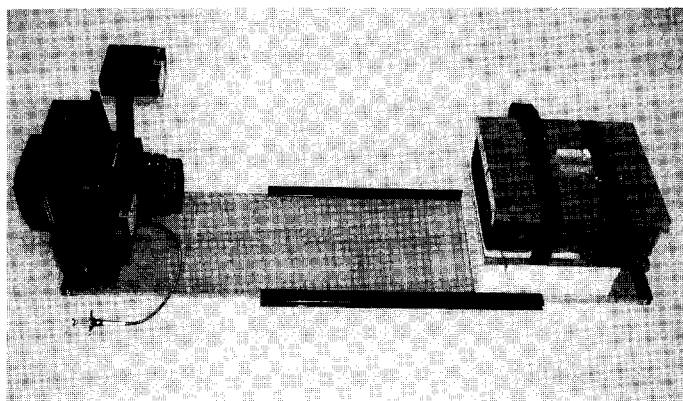


写真 2

いには、このように、感光フィルム版にひとまずデータをとるという手順は不要になる。ただし、現在のところは、上記のやや迂遠な方法が、簡便にして妥当な精度を保ちうるものであると考えられる。（写真2参照）

2. 続く第2段階が、このフィルム版のドラムスキャンニングによるデータベース作成である。ドラムスキャナーの使用は、国立民族学博物館の杉田繁治教授の発案によるもので、同博物館情報管理施設の情報システム係長吉崎幸二氏、NCC データベースサービス社の積健一氏の協力を得て、同館に設置されている阿部設計製の DRUM SCAN DENSITOMETER (MODEL 2605) を使用した。この機器は、円周長 500 mm のドラムを搭載し、白黒およびカラーフィルムの透過または反射による濃度の測定をデジタル直読式で行うもので、サンプリング・ピッチは $25\mu\text{m}$ (1mm につき40本走査) から、50, 100, 200, 500, 1000 μm の6段階切替が可能である。このドラム上に、小口底面が写された現像済のカラーポジフィルムを、ドラムの回転方向と小口底面の縞目方向とが平行になるようにセットし、条痕の類型を捉えやすくするため、分解能を透過式・白黒1次元 (2^8 つまり256階調) に限定して操作することにした。

なお、サンプリング・ピッチとしては、 $50\mu\text{m}$ を選んだ。このサイズであれば、上記の撮影方式によって得られるフィルム映像上の小口底面を、400本前後で走査することになる。この値は原資料の丁数に近く、精度としては研究目標に照らして必要かつ充分であると考えられるからである。

さらに第Ⅲ節で述べたように、必要なデータは、小口底面全体のうち、全長を3等分して腹より3分の1ほどの部分には適切な形で存在しないとの考えを、スキャンニング操作の段階で反映させなくてはならない。より正確には、背にごく近い部分もあわせて除去されるべきである。背の綴じしろ部分およびその近くにまで条痕が伸び込むことは、綴じ糸に大きなゆりみが出たまま使用されたばあい限り、ふつうは起こりえない。したがって、他の資料との比較上、この部分のデータを含めてしまうことは混乱を招きうるからである。そこで、小口底面の背から腹までの全長を6等分し、背より6分の1、腹より6分の2を除去し、残りの部分（全長の半分）のみを上述のピッチで走査することにした。

以上のような設定でデータを採集するのであるが、その概要はつぎのごとくである。すなわち使用機器は、フィルム面の測定対象部分の全面にわたり、それを $50\mu\text{m}$ 平方のサイズのスポットの集積面として捉えることになる。そして、それぞれのスポットの濃淡を純白から純黒にいたる、1から256までの階調値のいずれかに転換する。

このようなデータは、各スポットがどの走査線上のどの位置に存在するかという情報とあわせて、上記ドラムスキャナーの制御コンピュータである NOVA 3/D に連結させられた磁気ディスクに、1走査線分を1単位として記憶され、データベース化作業はここに完了する。

次節では、このようにして集積された情報を駆使して、小口底面の条痕を、第Ⅲ節で考えた

ような文明史的意味を強調しうる画像として析出する操作を説明する⁷⁾。

- 1) 宮城県・福島県・東京都・石川県・愛知県・福井県・滋賀県・京都府・大阪府・奈良県・高知県・長崎県である。しかし、調査はもちろん網羅的ではありえない。新聞や放送といったマスメディアを通じての時折の呼びかけのほか、地域の古文書調査を実施された方々から、調査時に見かけたことがある、との記憶情報を提供していただくという方法もとっている。諸方面から、なお一層のご協力をお願いしたい。
- 2) 高井蘭山(文左衛門)の職名は、西尾市の岩瀬文庫に蔵されている『随用搜笈早字節用集』の天保14年板下稿本(板元願人・永楽屋東四郎)の巻末記によった。
- 3) 版元は、京都の北村四郎兵衛と大坂の山内五郎兵衛。天地 25.5 cm。総丁数402(巻首81.5, 字引305.5, 巻末15/内1丁重複)。内容は、天保2年版と巻首の一部(神儒仏之弁並図)を除き同じ。序文1丁と奥付直前の半丁が、表紙替えに際し除かれた模様。
- 4) 清水実氏からは、さらに本節で述べる撮影技術についても指導を賜った。記して謝意を表したい。
- 5) 今田洋三・中野三敏・宗政五十緒・尾形仿ノ座談「近世の出版」『文学』49巻11号(1981), 30ページ参照。
- 6) なお、第Ⅵ節の後半で触れるようなレーヨン入り機械漉き和紙製の複製版節用集の小口を撮るばあいには、洋紙本小口と同様に光の反射量がきわめて大きくなり、ストロボに近い上端部分がやや照明過多となる。その際には、ストロボの位置をレンズの高さ近くにまで降ろす必要がある。
- 7) ドラムスキャニングは、フィルムをドラムに貼りつける段階で、ややていねいな手仕事が要求される。上記の積健一氏には、計算機操作のほか、この面でも優秀な腕を発揮して頂いた。記して感謝したい。

V 電算機処理による条痕画像の作成

この作業を担う機器システムは、同じく国立民族学博物館情報管理施設に設置されている汎用ホスト計算機 IBM 4341-PO2, ならびにそれに連結させられた磁気ディスク, そして操作端末である IBM 5500 からなる。

めざす小口底面の条痕画像は、既述の NOVA 3/D の磁気ディスクのデータベースから上記ホスト計算機へとデータ転送を行った後、4つの処理過程を経て完成する。以下、2種の文久4年版『永代節用無尽蔵』(A, B)のデータを用いた図3, 4, 5, 6を利用しながら、各過程の説明をする。

図3は、前節末にのべた1単位分の情報、すなわちドラムスキャナー1走査線上にならぶ全スポットの濃度値の累積総和(これを累積濃度と呼ぶことにする)をもとに作成する。走査線は、すでにのべたように400本あまりあったが、それぞれの累積濃度を求め、その値をドラムスキャニング時の走査線の走行順に棒グラフで表示すると図3のような形状となる。縦軸は累積濃度値を示す。ただし、ディスプレイ・スクリーンのサイズに合わせて一定比の縮小を行っている。グラフの両端が急傾斜で下降しているのは、小口底面撮影時にオモテ・ウラの表紙の下端を白紙で覆っておいたために生じる極端な累積濃度減少のせいである。e1は、資料の第1丁

日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について（横山）

A1

B1

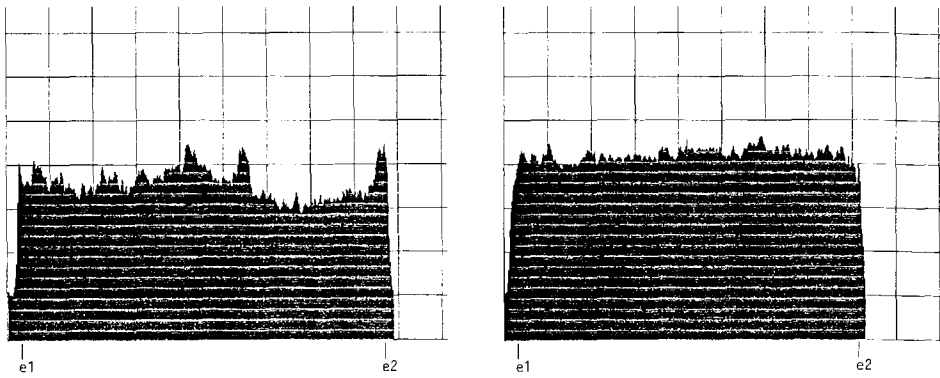


図 3

A2

B2

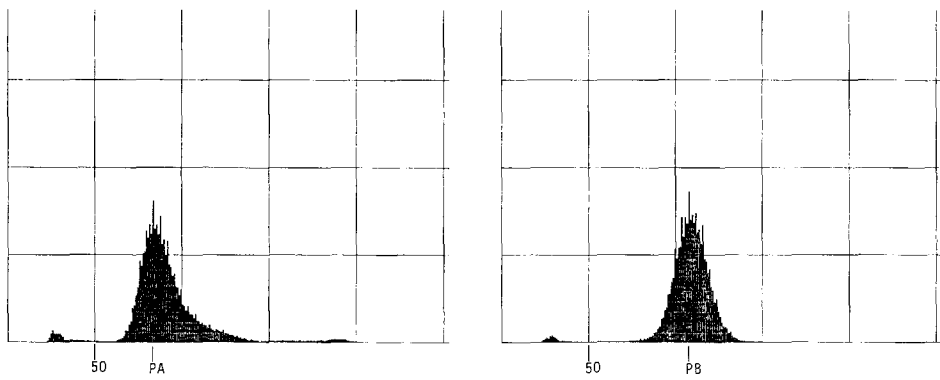


図 4

A3

B3

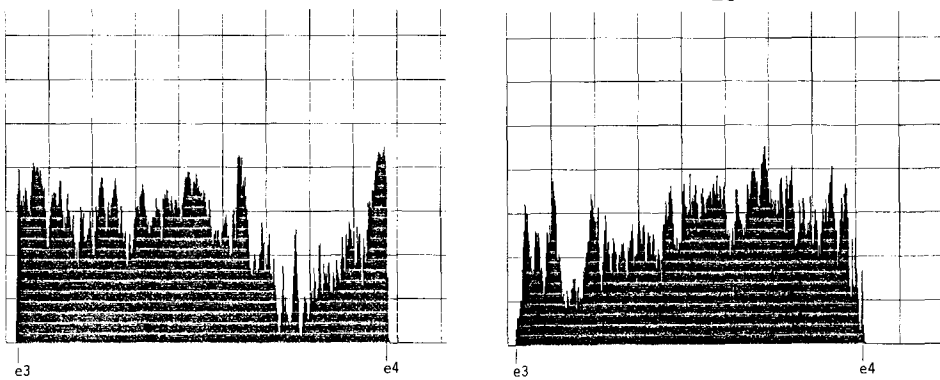


図 5

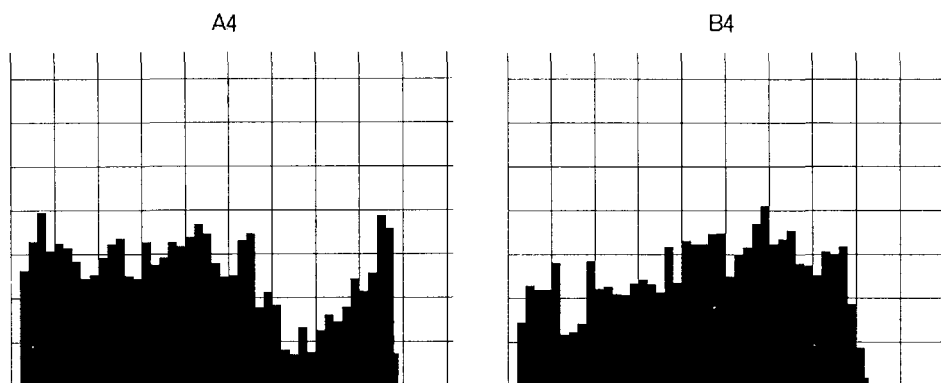


図 6

目の（より正確には、第1丁目の下端の背側より6分の1、腹側より6分の2を除いた部分の）累積濃度にはほぼ対応している。同様に e2 は、資料の最終丁とほぼ対応する。

この図像は、一見肉眼で見た小口底面の垢紋の濃淡分布とかなり照応するかのようであるが、そうでないばあいも多い。つまり、1 走査線上の或る部分に強い黒変があっても、その線上の他の部分がさして黒くないばあいには、累積濃度値は、たとえば、まんべんなく淡黒い走査線のばあいと同じになることもあるからである。前節でのべた技術の性格からもわかるように、すでに図3にあらわれた像は、原資料からの一定の抽象化を経た加工像であることを念頭に置きたい。

図3の問題点は、この抽象化において、あらゆるタイプの黒変が、文字どおり機械的な平等扱いを受けすぎていることである。我々が求めているのは、それぞれの資料の使用者が、とくに強い関心を示し、より頻繁に読んだ部分を強調して示せる図像である。たしかに図3のA1、B1では、その形状を対比したり分類したりするのは、複雑かつ曖昧な作業となるだろう。それは、いわば原資料の小口底面それぞれの“汚れ具合”なるものを、肉眼の印象で論じるとあまり変わらないと言ってよい。

そこで、図4の図像を用いて、つぎの加工へとむかうことにする。図4（A2、B2）は、ヒストグラムと呼ばれるソフトを用いたもので、それぞれの資料のフィルム映像のうち、ドラムスキニングを行った部分全面をさまざまな濃淡で覆う $50\mu\text{m}$ 平方のスポットのすべてを、1 から256の濃度値に従って分類し、濃度値を横軸にとり、各濃度のスポット数を縦軸上に表示せしめるものである。なお、縦軸はディスプレイ・スクリーンのサイズに合わせて一定比の縮小を行っている。

いずれも大小の突起部をもつ像を示すが、左端の濃度値25前後の小突起は、表紙下端を覆っていた白紙部分のデータが表われているものである。注目されるのは、大きなほうの突起の頂

点を示す濃度 P (PA, PB) が、このグラフから容易に読みとれることである。この頂点濃度 P とは、言い換えれば各資料のデータベースに含まれるさまざまな濃度値のスポットのうちの最多頻度濃度値を意味する。これは、それぞれの資料のかつての使用者がつけた手垢や摩耗のうちの、もっとも月並な位を示すと見てよい。そして、この値より大きな濃度をもつスポットこそは、使用者がとくにしばしば気にかけて箇所に出るものであり、我々が文明史的関心からさぐりあてたいと思う部分を構成するスポットであると言ってよい。

そこで、資料 A のデータからは PA 以下、B のデータからは PB 以下の濃度値をもつスポット群を一切捨象して、再び図 3 を作ったのと同じ手法で各走査線上の累積濃度値を求めてみると、図 5 のような像が得られる。これらのなかに見られる数々の突出部こそは、その節用集のかつての使用者が、忘れがちでも放っておけないと、とくにこだわった札法類の記載部分に、より鮮明に対応していると見てよい。

ただし、図 5 では凹凸がいささか複雑で、そのまま類型分類を行なうには無理がある。そこで、この 400 あまりの縦棒を $e3$ から $e4$ にむかって 10 本ごとに束ね、それぞれの平均値をもって表示すると、図 6 を得る。ようやくここにいたって我々は、かつての節用集使用者がその小口底面に無意識のうちに残した、文明維持の努力の足跡を、かなりあざやかに対比・分類しうる簡明な図像で捉えることができるにいったと言える。参考までに、本稿末尾に「付録」として、上記の図 3 から図 6 にかけての画像処理に用いたプログラムを載せておく。

なお、以上の説明では、簡略化のため、先に掲げた図 4 のヒストグラム A2 において、 PA からはるか右に進んだところ（濃度値 190 前後）にゆるやかな盛りあがりが出ていることについての解説を省いた。これは、じつは原資料の小口底面に、旧蔵者が家名の一文字を墨書していたために検出された、極度の黒変部分である。このようなデータは、本研究の目ざすところから見て、一種の障害である。したがって、墨書のように手垢以外の高濃度を示すスポットについては、その部分のデータを最多頻度濃度値（このばあいには PA ）で置換するという操作を行なうことにした。この処理を、カラー・グラフィック・ディスプレイ機器 IKEGAMI RAMTEC 9400 を用いて表示したものが写真 3 である。左のスクリーンが処理前、中央が処理中、右が処理後のものである。左スクリーン内の左側の図が、データベースから再生した原映像、右側が累積



写真 3

濃度の総和を示すグラフである。右スクリーン内に表示されているものとの凹凸の差違に注目されたい（グラフ表示幅が左と右2つのスクリーンで異なるのは、たんに表示時の倍率変換による）。念のため、図7（A5）として、この同一資料の墨跡調整処理後の画像を掲げておく。前掲図6（A4）と比較されたい。

さて次節では、このような処理過程を経て作られた節用集小口底面の条痕画像のうち、試みに上記の A5, B4 の2点にさらに6点の例を加えて比較し、今後どのような研究が展開されるかについて、その可能性をさぐることで結びとしたい。

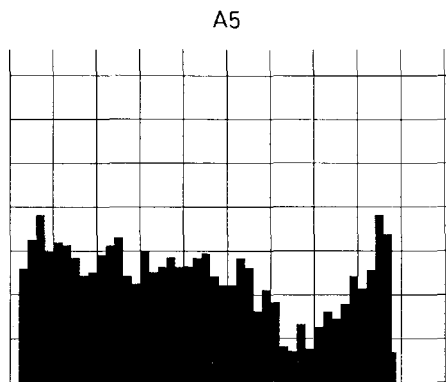


図7

Ⅵ 条痕画像の型分類の試みと展望

本節では、この研究がさしあたり対象としている『永代節用無尽蔵』の文政13年版・天保2年版・嘉永2年版・文久4年版の4種のうち、データの豊富な後2者に限定した議論にとどめたい。

嘉永版と文久版を比較したばあい、微妙な差違は数々見られるものの、第Ⅱ節でのべたように、歴史や地理の知識と比較的現世的な礼法を盛りこんだ巻首部、字引の部分である巻中央部、陰陽道系の神々への礼を説いた巻末部という3部構成については一貫しており、丁数も、嘉永版では、巻首部113.5丁、巻中央部306.5丁、巻末部15丁、計435丁にたいして、文久版では、同順に、112.5、306.5、15、計434丁という値になることに示されるように、目立った変化は見られない。また、記事内容としては、嘉永版に比べ文久版では、巻首部に和歌・俳諧に関する記事がやや増加していること、また儒学の徳目の体现者の例が、中国ではなく日本の歴史のなかに求められていること、そして嘉永版では1丁半分の小幅欄として巻首にあった男女相性占いが、文久版では巻末の1丁分の小幅欄にまわっていることなどを除いては、大きな変化は見られない。したがって、前節でのべたような抽象化の手順で得られた条痕画像の型分類を行う作業では、とりあえずふたつの版を同じ版のごとく対比させてもよいと考えられる。

そこで、これらの版の条痕画像の分類にかかるわけであるが、方向としては大きく2通りに分かれると思われる。第1は、いわば機械的な手法。すなわち、グラフの上端が描く凹凸線の形状について、巻首から巻末にいたるどの箇所の突出も同等価値のものとして、解析幾何学的に処理し、収集データがいくつくらいのバラエティの凹凸型グループに集斂してゆくかを観察

する方法である。このばあい各凹凸型グループの意味するところが何であるかの解釈は、グループ分けが出来た段階で考察することになる。

第2の方法は、目的論的な方法である。すなわち、原資料である節用集の10丁分が、棒グラフ状の条痕画像の棒1本にほぼ対応し、しかも原資料の巻首から巻末への丁の並びと、画像のなかの棒の左端から右端への並びが対応していることに鑑み、当初から第Ⅱ節でのべたような文明史的観点から見て注目すべき箇所をマークし、その部位の凹凸態様を重視する方法である。

もちろん第2の方法は、注目すべき箇所をどう決めるかにより、多様な展開を示しうる。筆者としては、しかしながら、第1の方法のほうが、歴史家の“さかしら”から一旦はなれ去るという利点があると考ええる。ただ残念ながら、上記2種の版に関して収集済みの画像データが、1989年秋現在でまだ20数種でしかないという段階では、夢の域を出ない。ただし見通しとしては、いずれこの方法によって、工業化以前の日本文明を支えた人々の様々な礼へのこだわりの類型が発見され、今までの日本の伝統社会の認識に使われていた、階層や職種や地域などといった分類範疇とは別のものが創出されるのではないかと思われる。

このような予測は、じつは第2の方法、つまり当面の限られた画像データに、あえて何らかの意味を求めようとするばあいに可能な方法を、幾通りか試みた結果、浮かびあがってきたものである。そこで、第2の方法の1例を示すため、まず分類の基準として、どのあたりの棒の突出を重視するかを述べたい。左端の棒を第1本目として右方に数えてゆくことにする。

巻首部では儒学の徳目を説いた部分、ならびに起居振舞や文雅の道の指南の箇所が注目される。これらは条痕画像では、第1から第3本目ならびに第8から第10本目にかけてあらわれる。このふたつの部位をあわせて第ⅰ部と呼んでおく。つぎに、書状指南・服忌令・呪詛法・万病妙薬などが字引部分の頭書に登場する部位が注目される。これを第ⅱ部とする。棒順で言えば、第24から第26本目、条痕画像中央より、やや右よりのところである。それから、第ⅲ部は巻末部の15丁分。これは条痕画像の右端から数えて第1、2本目の末端部位である。

以上、ⅰ～ⅲの3つの部位のいずれにおいてであれ、強い突出が認められるばあいを〈+〉、際立っては認められないばあいを〈-〉記号で表示すると、ⅰ、ⅱ、ⅲとも〈+〉になるばあいから、逆にすべて〈-〉になるばあいまで、8通りの組合せが考えられる。これを念頭に、図8（1～2）に掲げた8例を検討したい（A、B、C、D、E、F、G、H—なおAは図7（A5）、Bは図6（B4）を転用）。

A、C、Dの3点は〈+・+・+〉のグループに属し、EとFは〈+・-・-〉、GとHは〈-・-・+〉、Bは〈-・-・-〉の類型を示す。なおEとFは、注目部位の範囲をひろげれば同じ類型にはどういおさまりえない大差を示している。今まで収集されたデータで見えるかぎり、これら以外に目立った型を示すものは、東北大学狩野文庫蔵の嘉永版の1本が、ゆるやかな〈+・-・+〉を示した以外には、見つかっていないのが興味深い。

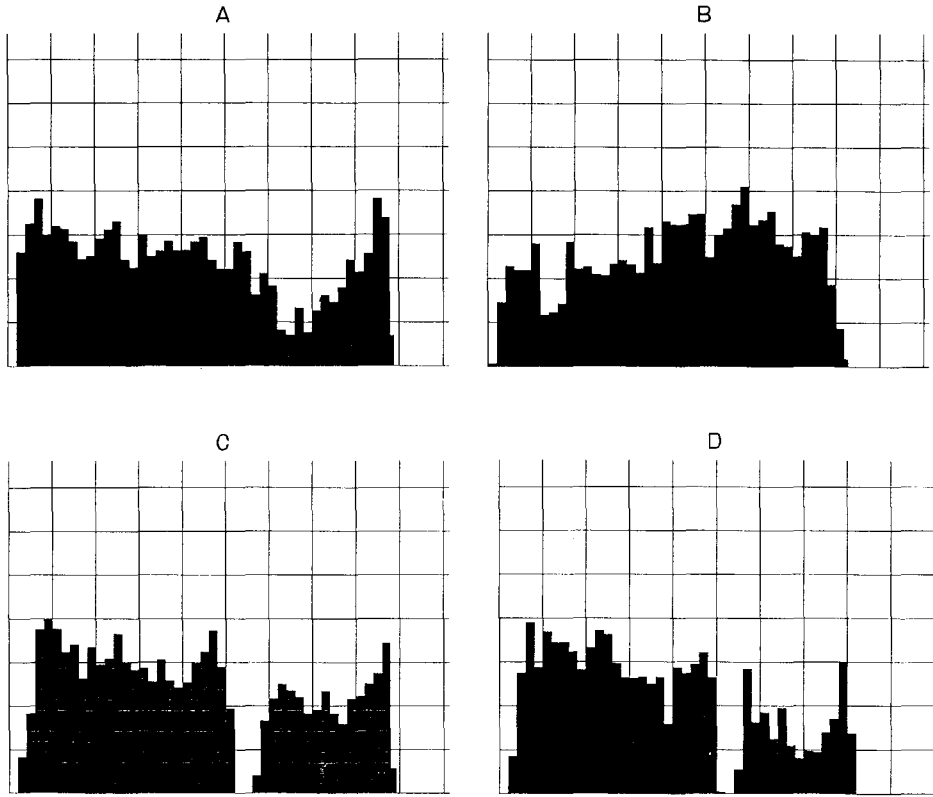


図 8(1)

さて、これらを見ただけでは、もちろん結論めいたものは出せないが、若干のコメントを付してみたい。まず、今までの収集データ全体から見ても、〈＋・＋・＋〉型の件数がかなり多いことが注目される。しかもその広がり、地域や職種を越えるようである。これは19世紀の日本社会における陰陽道の根強さについて再考をうながす知見であると言えるかもしれない。ちなみにAは、丹後半島の近くの山村から出たもの（福知山高校蔵、職種未詳）、Cは京都市上京区の富有な金細工職の家から出たもの、Dは京都大学人文科学研究所蔵で旧蔵者不明のものである。なお、Cを出した家は、代々真宗大谷派の重立った門徒であり、教理のうえでは陰陽道系の神々への関心はないはずであるが、なおかつiiiの部位を突出させている点が注目される。

Eは、陰陽道へのこだわりが一切みられない型であり、今までのところあまり多くは見かけない種類である。全体に見て上端が直線的に右下がりの傾斜を示すのは、字引部分を熱心に使ったばあいの特徴と言えそうである。これは、天保版で同様の型を示した節用集を蔵す京都市中京区の町年寄格の家での聞き取り調査と、京都便利堂がレーヨン入り機械漉き和紙を使って

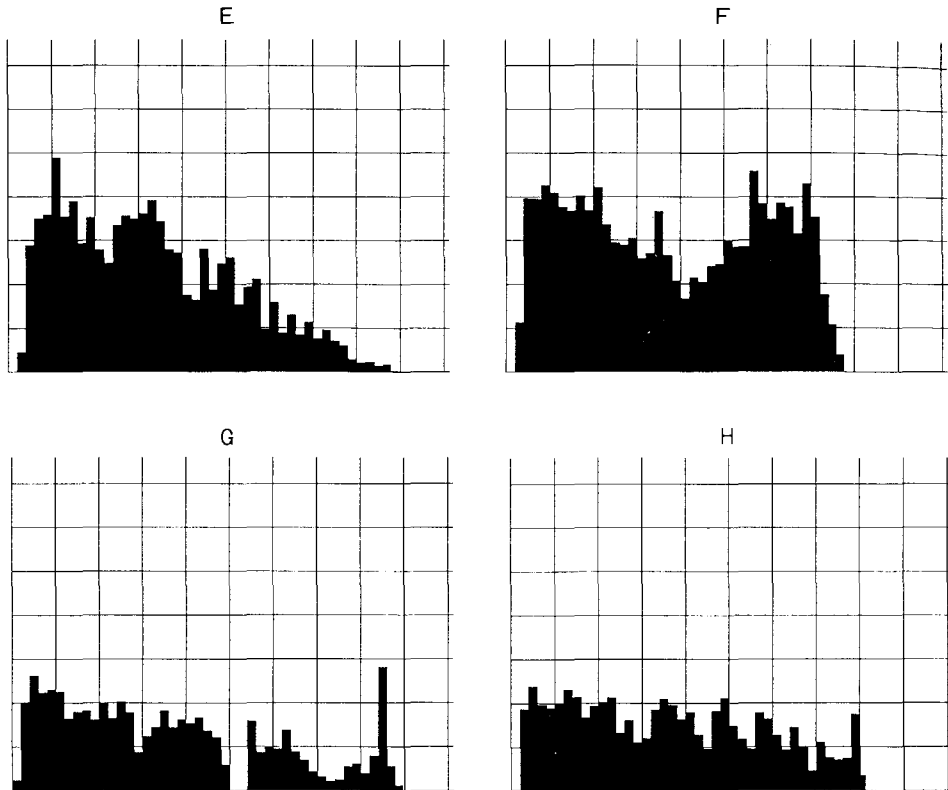


図 8(2)

1983年に複製出版した文久版を用いて、筆者が行った手垢紋実験の結果からの推定である。ちなみにEは、かつて福島県郡山市近郊の郷土地主の家で使われていたものである。

Fもあまり見かけない型である。前半部は、以上見た2種と大差ないが、後半部は字引き上段の寺院一覧の記事がよく読まれたことを意味するか、あるいは節用集の繰り方が一風変わっていたか、なお後考を要す。旧蔵家は、かつて滋賀県北で北陸街道沿いに饅頭屋を営んでいたという。なお、京都大学人文科学研究所蔵の天保版の1本に、かなり近い型を示すものがあるが、こちらの旧蔵者は不明である。

GとHは、かなりよく見かける型である。世俗の礼法にも字引部分にもさほどの関心を示さないケースである。ただし、陰陽道系の知識のなかでも五行説に従って名付けの字を選ぶ方法を説いた「名乗字」のところに、濃い条痕があらわれている。このグループも、職種・地域を越えて見出すことができる。ちなみにGの旧蔵家は、京都府宇治市から徒歩で1時間ほどの山村の庄屋の分家筋にあたり、長らく村中の男子の名を付けてきた家であるが、Hのほうは仙台

藩の奥医をつとめた家である。

Bは、かなりユニークな型である。神々への特別な関心のなさということではEも同様であるが、こちらは世俗の札についてのこだわりも薄い。中央に突出部がせりあがるのは、字引としての利用に加え、字引頭書の王代一覧のうちの近世部分や寺院一覧もよく参照したということか。ただし、第ii部位にあたる箇所は、はっきりと凹みを見みせているのが興味深い。現在のところ、この型を示したのはこの1点のみである。なお、旧蔵家は二本松藩の江戸詰側用人を代々出した家である。

以上のようなグループ分けの1例は、今後データ収集が進むほどに、より具体的なイメージを伴ったものとして肉付けされると同時に、解析幾何学的方法による修正もしいたに加えられるべくはである。そしておそらく、そのような将来の分類範疇にまとめあげられる家々の主たちの群像は、日本の旧文明の維持ということにおいて、それぞれが、無自覚ながらどのような役割をはたしていたかという点で、わかりやすく色分けされるはずである。そこにいたる道程は依然長いが、冒頭に掲げた、歴史研究における“無自覚行動”と“度合い”の問題に答えるための一歩が踏み出されたことは確かである。

付記 本稿をまとめるにいたるまでに、数多くの組織のほか、個人の協力を得た。そのうち若干の方々については、すでに文中ならびに各節末の注に記したが、節用集所蔵家と節用集所在情報の提供者については、プライバシーへの配慮から御名前を掲げることをひかえた。ここに、いずれの方々に対しても、筆者の深甚の謝意を捧げる次第である。

なお、本研究には、つぎのような財政的支援をうけた。文部省科学研究費補助金（1984～85年度）、日本生命財団研究助成金（1988年前期、但し上田篤教授を代表とするマスシティ研究会の一員として）、稲盛財団研究助成金（1989年度、とくに計量化分析法による研究に対して）。

また、京都大学人文科学研究所事務官の林茂榮氏、井本哲夫氏のご協力にも深謝したい。

付録 条痕画像処理プログラム

右の2ページにわたるプログラムは、筆者の意を汲むかたちで、第IV節2.の冒頭に記した国立民族学博物館の研究者ならびに技術スタッフ、とくに吉崎幸二氏のご尽力により、約1年間の試行期間を経て作成されたものである。以下、簡単な説明を加えておく。

① SIM00410の操作では、各走査線上のスポット群の濃度データが読み込まれ、SIM00530では、各走査線上の累積濃度値が求められる。

② SIM00570ではヒストグラム処理が行なわれ、SIM00710から780にかけては、最多頻度濃度値が求められる。

③ つぎに、SIM00910から960にかけて、最多頻度濃度値よりも淡いスポットのデータを切り捨てたうえで、各走査線上の濃度累積値が求められる。

④ SIM01000から1250にかけては、走査線10本ごとの平均値が求められる。

⑤ SIM01270以下は、以上4種の処理結果それぞれのスクリーン・ディスプレイ・プログラムである。

日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について（横山）

```

C*****
C
C 節用集（永代節用無尽蔵）
C 標準地
C*****
REAL          HIST( 256 ), NODO1( 1000 ), NODO2( 1000 ),
*            NODO3( 1000 )
INTEGER*2     FN( 4 ), FT( 4 ), FM( 2 ), IBUF( 1000 )
WRITE( 6, 201 )
201  FORMAT( 1H, ' GAZOU DATA FILE NAME' )
      READ ( 5, 204 ) FN
      WRITE( 6, 202 )
202  FORMAT( 1H, ' GAZOU DATA FILE TYPE' )
      READ ( 5, 204 ) FT
      WRITE( 6, 203 )
203  FORMAT( 1H, ' GAZOU DATA FILE MODE' )
      READ ( 5, 205 ) FM
204  FORMAT( 4A2 )
205  FORMAT( 2A2 )
      WRITE( 6, 206 )
206  FORMAT( 1H, ' GAZOU DATA SIZE X,Y = ' )
      READ ( 5, * ) ITATE, IYOKO

C
C  *----- INITIALIZE -----*
C
      DO 210 I = 1, 1000
        NODO1( I ) = 0
        NODO2( I ) = 0
        NODO3( I ) = 0
210  CONTINUE
      DO 211 I = 1, 256
211  HIST( I ) = 0

C
      MINHS      = 99999
      MAXHS      = 0
      MAXFRQ     = 0
      JBYTE      = IYOKO * 2

C
C**** LOOP START *****C
      DO 240 II = 1, ITATE
        CALL FSREAD( FN, FT, FM, 0, 1, IBUF, JBYTE, ILL )
        IF ( ILL .NE. 0 ) THEN
          WRITE( 6, 220 ) ILL
220  FORMAT( 1H, '***** GAZOU DATA READ ERROR ((' ,
*          I3, ')) *****' )
          STOP
        ENDIF
      DO 230 JJ = 1, IYOKO
C
C  *---- RUISEKI PATTERN1 ( 20 SPOT / MM ) -----C
C
        NODO1( II ) = IBUF( JJ ) + NODO1( II )
C
C  *---- HISTGRAM -----*
C
        HIST( IBUF( JJ ) ) = HIST( IBUF( JJ ) ) + 1
        MBUF                = IBUF( JJ )
        MAXHS               = MAX0( MBUF, MAXHS )
        MINHS               = MIN0( MBUF, MINHS )
230  CONTINUE
240  CONTINUE
C
      WRITE( 6, 250 ) MINHS, MAXHS
250  FORMAT( 1H, 'HISTGRAM MIN POINT = ', I4, 5X,
*          ' MAX POINT = ', I4 )
C**** LOOP END *****C

```

SIM00010
 SIM00020
 SIM00030
 SIM00040
 SIM00050
 SIM00060
 SIM00070
 SIM00080
 SIM00090
 SIM00100
 SIM00110
 SIM00120
 SIM00130
 SIM00140
 SIM00150
 SIM00160
 SIM00170
 SIM00180
 SIM00190
 SIM00200
 SIM00210
 SIM00220
 SIM00230
 SIM00240
 SIM00250
 SIM00260
 SIM00270
 SIM00280
 SIM00290
 SIM00300
 SIM00310
 SIM00320
 SIM00330
 SIM00340
 SIM00350
 SIM00360
 SIM00370
 SIM00380
 SIM00390
 SIM00400
 SIM00410
 SIM00420
 SIM00430
 SIM00440
 SIM00450
 SIM00460
 SIM00470
 SIM00480
 SIM00490
 SIM00500
 SIM00510
 SIM00520
 SIM00530
 SIM00540
 SIM00550
 SIM00560
 SIM00570
 SIM00580
 SIM00590
 SIM00600
 SIM00610
 SIM00620
 SIM00630
 SIM00640
 SIM00650
 SIM00660
 SIM00670

人 文 学 報

```

C                                     SIM00680
C---- HISTGRAM MAX FREQUENCY POINT -----C SIM00690
C                                     SIM00700
      DO 260 II = 1, 256                      SIM00710
        IF ( HIST(II) .GT. MAXFRQ ) THEN      SIM00720
          MAXFRQ = HIST( II )                SIM00730
          MAXPNT = II                        SIM00740
        ENDIF                                SIM00750
260    CONTINUE                              SIM00760
      WRITE( 6, 270 ) MAXPNT                  SIM00770
270    FORMAT( 1H , 'HISTGRAM MAX FREQUENCY POINT = ', I3 ) SIM00780
C                                     SIM00790
C---- RUISEKI PATTERN2 ( MAX-FREQUENCY-POINT GRATER DATA ) -----C SIM00800
C                                     SIM00810
      CALL FSCLOS( FN, FT, FM, ILL )          SIM00820
      DO 290 II = 1, ITATE                    SIM00830
        CALL FSREAD( FN, FT, FM, 0, 1, IBUF, JBYTE, ILL ) SIM00840
        IF ( ILL .NE. 0 ) THEN                SIM00850
          WRITE( 6, 280 )                     SIM00860
280      FORMAT( 1H , '***** GAZOU DATA READ ERROR *****' ) SIM00870
          STOP                                SIM00880
        ENDIF                                SIM00890
                                           SIM00900
        DO 281 JJ = 1, IYOKO                  SIM00910
          IF ( IBUF(JJ) .LT. MAXPNT ) THEN    SIM00920
            IBUF( JJ ) = 0                    SIM00930
          ENDIF                                SIM00940
          NODO2( II ) = IBUF( JJ ) + NODO2( II ) SIM00950
281    CONTINUE                              SIM00960
290    CONTINUE                              SIM00970
C                                     SIM00980
C---- RUISEKI PATTERN3 ( 10 SPOT / MM ) -----C SIM00990
C                                     SIM01000
      IWORK = ITATE / 10                      SIM01010
      IAEND = IWORK * 10                      SIM01020
      DO 320 IST = 1, IAEND, 10                SIM01030
        IEN = IST + 9                          SIM01040
        IGK = 0                                SIM01050
        DO 300 IX = IST, IEN                    SIM01060
          IGK = IGK + NODO2( IX )              SIM01070
300      CONTINUE                              SIM01080
          AVER = IGK / 10                      SIM01090
          DO 310 IX = IST, IEN                  SIM01100
            NODO3( IX ) = AVER                 SIM01110
310      CONTINUE                              SIM01120
320    CONTINUE                              SIM01130
C                                     SIM01140
      IF ( ITATE .GT. IAEND ) THEN             SIM01150
        IGK = 0                                SIM01160
        IWK = ITATE - IAEND                    SIM01170
        DO 330 IX = IAEND + 1, ITATE           SIM01180
          IGK = IGK + NODO2( IX )              SIM01190
330      CONTINUE                              SIM01200
          AVER = IGK / IWK                      SIM01210
          DO 340 IX = IAEND + 1, ITATE         SIM01220
            NODO3( IX ) = AVER                 SIM01230
340      CONTINUE                              SIM01240
        ENDIF                                SIM01250
C                                     SIM01260
C---- HISTGRAM DATA DISPLAY -----C SIM01270
C                                     SIM01280
      CALL HYOJI( 256, HIST )                 SIM01290
C                                     SIM01300
C---- NODOO DATA DISPLAY -----C SIM01310
C                                     SIM01320
      *** RUISEKI PATTERN1 ( 20 SPOT / MM ) *** SIM01330
      CALL HYOJI( ITATE, NODO1 )              SIM01340
C      *** RUISEKI PATTERN2 ( MAX-FREQUENCY-POINT GRATER DATA ) *** SIM01350
      CALL HYOJI( ITATE, NODO2 )              SIM01360
C      *** RUISEKI PATTERN3 ( 10 SPOT / MM ) *** SIM01370
      CALL HYOJI( ITATE, NODO3 )              SIM01380
CCC                                           SIM01390
C*****C SIM01400
C- PROGRAM END -C SIM01410
C*****C SIM01420
      END                                     SIM01430

```